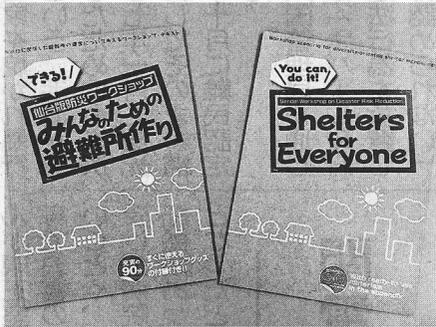


# 東北復興日記



136



「大切な人を守りたい」。これは命あるものに共通する思いです。極寒の二月、六歳の娘の「あれ何?」という言葉に見上げた街路には、国連防災世界会議のフラッグが風に揺れていました。不意に、東日本大震災の時、三歳だった娘と職場の部下、障害のある義父母を「守らなければ」と必死に走ったことを思い出

せんだいプロジェクトチーム  
眞野美加さん



## 体験発信し未来に貢献

し、涙がこみあげました。

先月十四日から五日間、仙台で開かれた会議には百八十七の国連加盟国をはじめ、国内外から延べ十五万人以上が参加し、国内史上最大級の国際会議となりました。NP O、市民団体をはじめ、医療、福祉、建築、農業、漁業などの生業を持つ人が参加・発信したことで、私たちの暮らしが「多様な主体の協働」で成り立ち、「誰かが誰かの支えになっている」ことを市民が実感しました。

私は「女性と防災」テーマ館で、避難所の運営を考える「仙台版防災ワークショップ」みんなのための避難所作

「り」を行いました。他県の参加者と東北で被災した女性が一つのテーブルでアイデアを出し合う様子を外国人にも見ていただき、会議に合わせて制作した英語版テキスト「写真」を喜んで持ち帰ってもらいました。

「みんなのための避難所作」の内容をまとめたテキストの問い合わせは、仙台市男女共同参画推進センター エル・ソーラ仙台管理事業課 電話022(268)8044へ。

験を語る重要性に気づく契機となりました。

体験を語り、市民発の防災

・減災の手法を伝え、復興に取り組む姿を発信することが、国内外の未来の被災地に貢献できることだと思えます。

◇

この連載は、東京のNP O法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。